

ドジョウ

山下 和 明

長い間ドジョウを飼っている。今は、成魚が5匹、幼魚が4匹、私の書斎に置かれた大きな水槽でメダカと一緒に元気に生活している。

ドジョウを飼い始めたのは、横浜地裁に勤務し、横須賀の官舎に住んでいた昭和56～57年ころである。最初に飼ったドジョウは、大きくて太い2匹とそれより小さくて細い1匹との合計3匹、いずれも横須賀市内のうなぎ店の店頭の水槽で泳いでいたのを、当時小学生であった長女が、私がドジョウを飼っているのを知っていて、その店の親父さんに頼んでもらってきてくれたものである。我が家では、大きくて太いのを雄とみなして「によろ太」「によろ吉」と、小さくて細いのを雌とみなして「によろ子」とそれぞれ名付け、既にそれまでに水槽で飼ってきていた他の魚などと同居させて、かわいがっていた（実際にはドジョウにおいては雌が大きく雄が小さい。このことを知ったのはずっと後になってからのことである）。

昭和58年4月、転勤により、横須賀から松山に転居した。魚など水生生物を飼うのが好きな者の遠距離の転居には、それまでかわいがっていたものをどのようにして移動するかという、少しやっかいな問題が伴う。いろいろ調べた結果、必要な手続きをし、特別料金を払えば、自分が乗客として乗る飛行機に乗せることができるということが分かった。しかし、そのためには、圧縮酸素の十分な注入、容器の完全密閉等、専門家の助けを得なければならないということも分かった。そこで、横須賀の駅前にあったペットショップに行き事情を

話して頼んだところ、店の主人が、「入れ物などは用意しておいてあげるから、横須賀を出る直前に持ってきなさい」と引き受けてくれた。

このようなことから、引っ越し当日、妻（同年7月に生まれることになる第三子がお腹にいた）、長女（小学校卒業直後）、次女（小学校4年生になったばかり）や裁判所の仲間が一所懸命引っ越し作業をしてくれている時に、私はといえば、大きなバケツに水槽の中の生物を移しこれを上記ペットショップに運び、必要な処理をしてもらった入れ物をまた官舎まで抱えて帰るという作業に従事しなければならなくなったのである。私が運んでいったバケツの中にあるものを見た主人と私との間で交わされた会話を、今でも覚えている。「それにしてもお客さん、金のかかったものはいないようだね。」「そうなんですよ。妻にも子にも友人にも、半分あきれられ、からかわれ、迷惑がられているんですよ」「まあ、趣味のない人にはね」（主人は、「趣味のない人にはね。」で止めてそれ以上は何も付け加えなかった）。この主人は、入れ物の準備も含めた一切を無償でやってくれたのであった。

官舎に持ち帰った魚たちの入れ物を羽田空港まで運ぶのもいうまでもなく私の仕事である。その夜一泊したホテルへ行くのにも、翌朝、空港の普通は行くことのない裏口のようなところで受付をしてもらうのにも、水の入った重い入れ物を抱えて運んでいった。そのため本来なら私が運ぶべき家族の荷物は、身重の妻と児童である娘二人が運ばざるをえなくなった。幸いに何事も起こらなかったからよかったようなものの、もし、私が魚たちにこだわったために妻やお腹の子や娘達にこの引っ越しに伴って何かが起こっていたら一生悔いても悔い切れないことになっていたであろうと、このときのことを思い出すと、今でも冷や汗が出る思いをするのである。

このようにして松山に移動したドジョウ3匹そのものがいつまで生きていたのか、今では覚えていない。しかし、ドジョウを飼い始めてから今日までの35年ばかりの間、我が家の水槽からドジョウが絶えることはほとんどなかった。その間、何度か新しいドジョウを仕入れた。仕入れ先は食用に生きたドジョウを

売っているスーパーである。今日までで最後に仕入れたのは平成25年2月27日で、山手線御徒町駅の近くにある「吉池」というスーパーの魚売り場にいた小さいのを約20匹購入した。冒頭に記した成魚5匹はその生き残りである。また、冒頭に記した幼魚4匹は、水槽内でこの5匹から生まれたもので、35年に及ぶ私のドジョウ飼育歴において、初めて獲得した二世である。

ドジョウについて記したが、好きなのはドジョウだけではない。昔なら日本のどこにでもいたような平凡な淡水性生物は皆好きである。淡水生生物でも、いわゆる熱帯魚など外国からきた珍しいものであるとか、人工的に改良して「美しく」したものにはそれほど魅力を感じない。また、同じ水性生物でも海水性のものにはそれほどの関心が湧かない。

ドジョウや、フナ、メダカ、タナゴ、沢ガニなど淡水性の生物を見ていると、心が落ち着き穏やかになると同時に、何となく元気が湧いてきて幸せな感情に包まれる。大げさに言えば、人生に対して肯定的になる。もっときざな言い方をすれば、生きてきてよかったという気になる。そのせいか、どこでどのような機会においてであっても、池や川、田、溝など淡水性生物がいる可能性のあるところに行くと、自然にそこには何かいるのではないかとのぞきたくなる。郷里の村の溝ともいえないような小さな小さな流れや水たまりであっても

ニューヨークのセントラルパークの池であっても、オランダの運河であっても、赤坂御園の美しい池であっても、その点は同じである。

いつのころからか、自分はなぜこのようにありふれた淡水性生物が好きなのであろうか、と考えることがあるようになった。好き嫌いに理由などはないという人もいる。それは生まれつきだという人もいる。最終的にはそのようにいうこともできるかもしれない。あるいはそのようにいうしかないのかもしれない。しかし、そのようにいわれても、そうとばかりもいえないのではないかとの思いが心から消えない。

私は、今では、自分の淡水性生物に対する好みには、自らの幼児体験が大いに与っているのではないかと考えている。この考えは、いつのころからか私の

心に芽生え、時を追って強まっていき、今では確信にまで至っている。科学的に真実性が証明されているわけではないから、客観的にいえば、根拠の乏しい仮説にすぎず、私の主観的確信にとどまるものである。しかし、同時にこの仮説が誤りであるということも証明されてはいないのであり、私はこの仮説は真実であるとの仮定の下に生きていくことにしているのである。

昭和18～9年ころ、それまで愛知県の渥美半島で生活していた私の両親は、鳥取の母の実家で暮らすようになった。母の実家で、祖母（母の母）が鳥取大地震の犠牲になり、二人いた叔父（母の弟）が二人とも結核に倒れ、一人は亡くなり、一人は東京から帰省して療養中であるなどのため、長女である母夫婦が面倒をみなければ成り立たなくなっていたのである。ところが、私は当時4～5歳であり、これを結核患者のいる家に置いておくわけにはいかないなどの事情のため、私は、両親と一緒にではなく、同じ村の別の家－母の実家の親戚（Y家）－に預けられてそこで暮らすようになった。この家には、私よりずっと年長のお兄さん2人とお姉さん1人がいた。この家の人達は、幼い私が同じ村の中とはいえ両親と離れて暮らさなければならぬのをかわいそうに思っただけであろう、私の喜びそうなことをいろいろとしてくれた。このようにしてくれたことの中心が魚取りであった。

この魚取りというのは、川の一部（上下をせき止めて上流側にバイパスを設け、流れが中に入らないようにしたもの）又は池の内部の水をバケツなどで掻き出し、中の魚をほとんど皆手づかみで捕まえるという豪快なものである。お兄さん達やお姉さんは、かわいそうな「かずあきちゃん」を喜ばせるためにという大義名分もあることではあり、度々この魚取りをやってくれたのである。この魚取りは私にとってそれまでに経験したことのない誠に楽しいものであり、心の浮き立つものであった。この親戚に預けられていた期間は、大人達には幼い私が両親から離されてかわいそうに思えたものであったかもしれないが、私にとっては、それどころか一生で一番楽しかったともいえる至福の期間であったのである。

淡水性生物を見ていると、私の心の底の方に潜んでいるこの幼いときの心の浮き立つような楽しくて仕方なかったときの感情が刺激されるのではないかというのが、私の仮説である。仮説ではあるが私にとっては確信である。それに違いないと信じて疑わない。

私に今に至るまでこのように大きな好影響を与え続けている魚取りなどをやってくれたお兄さん達やお姉さんを始めとするY家の人達は、自分達のしたことが私にこんなにも大きな好影響を与え続けているということは、全く考えたこともないであろう。全く考えもしない間にその全部又は大部分の人達は既にこの世を去ったことであろう。

人は、自分の言動により、全く知らない間に、自分では考えてもいなかったような影響を他人に与えていることがありうる。私がY家の皆さんから与えられた影響は誠に好ましいものであった。これにより私の人生がどれほど豊かになったかしれない。しかし、自分が知らない間に与えるかもしれない影響は好いものであるとは限らない。悪いものであることもあり得る。私は、このことを考えると恐ろしくならずにはいられないのである。

山梨学院大学法科大学院が平成30年3月をもって廃止されると聞いた。私は、縁があって同院の教員として平成18年9月から平成26年3月までの7年半勤務し、その間、院生を始めとして多くの人々と接する機会を得た。この間に、自分では気づかないままに周りの人々に悪い影響を与えてしまったのではないだろうか。悪い影響であっても、自分が与えたであろうと気づいていることはそれほど怖くない。怖いのは自分で気づかない間に与えているかもしれない悪い影響である。自分では気づかないままに悪い影響を与えてしまったということがないようにと、願うこと切なる最近である。

(平成29年8月26日)